

巻 頭 言

若 濱 五 郎（支部長）

去る6月7日の支部総会で今年度も引き続き支部長を仰せつかりました。平素のわが微力を思うと、じくじたるものがありますが、会員各位のお力添えをいただきながら63年度の事業を進めて参りたいと存じますので、宜しくお願い致します。

昨年度も恒例のように、研究発表会、講演会、談話会等が行なわれましたが、夫々盛会でありました。これも皆様の御蔭と感謝しております。特に今年2月、小樽市で行なわれた「小樽の冬と暮らし」の談話会では、地元小樽市の教育委員会をはじめ、小樽の方々の大きな御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

また、昨秋は釧路市で全国大会が開かれました。これは本部の事業ではありませんが、当支部としまして、プログラム編成その他、側面からの支援を行いました。釧路大会は大へん評判がよく、特に大々的なポスターセッションが初めて行なわれましたが、成功裡に終わりました。地元釧路在住の僅か4人の会員が寝食を忘れてその衝に当られたこと、また、北海道、釧路支庁、釧路市、北方圏センター、および北海道電力、日本電設等多くの企業の方々から絶大な御支援をいただきましたことに改めて感謝の意を表すものであります。

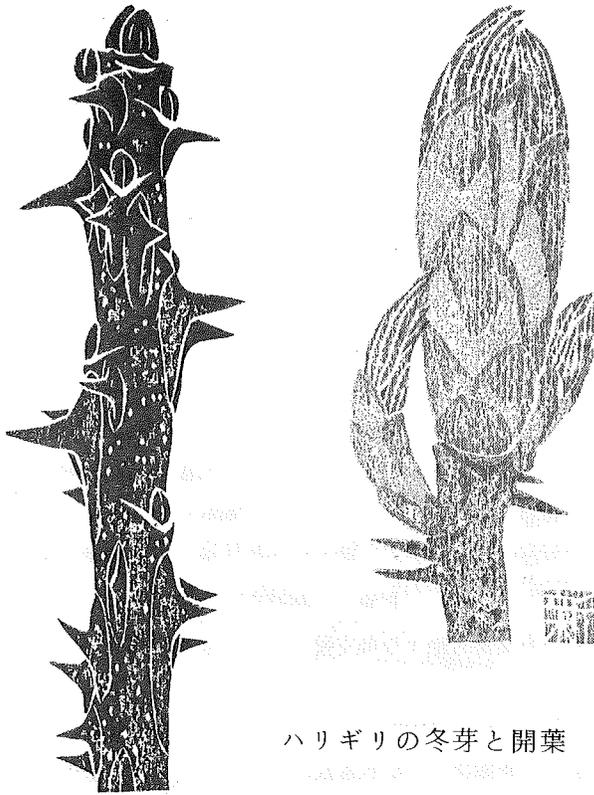
さて、雪氷学会は昭和14年3月14日、日本雪氷協会として発足以来50年となり、今秋その記念事業が行なわれることになっております。北海道でも記念講演会、写真展などが予定されております。

また、当支部は昭和34年5月18日に設立され、来年で満30年を迎えます。一昨年東北支部が発足し、昨秋は北信越支部が設立されましたが、北海道支部はその先輩支部として今後益々研鑽につとめなければならないと存じます。そのような意味を含め、来年は支部設立30周年事業を行なうことが先日の総会で提案承認されました。50周年、30周年と続きますが、御協力をお願い致します。具体的な内容につきましては目下、作業部会が検討中で、本誌にその原案が掲載されておりますので御意見をお寄せいただければ幸いです。

ところで、雪氷の問題は「古くて新しい」といわれます。雪国社会が急速に変容しつつある現在、雪氷の問題も変化しつつあり、新たな対応に迫られております。また、雪氷の積極利用も強くいわれております。それをうけて国でも「克雪、利雪」を重要課題にとり上げ、また、北海道をはじめ、雪国の各自治体も克雪、利雪を積極的に推進しております。われわれ北海道支部も、単に学問的な研究だけでなく、社会のニーズに応えられるように応用面での努力をしなければと存じます。

それにはまず、雪氷に関する情報交換が必要かと存じますが、その点、雪氷学会は大いに有効に利用できる場です。学会のいろいろな機会を利用して会員同士がお互に顔見知りとなり、知識・情報を交換し、議論できる仲間をふやすことが結局は会員の利益にもつながり、ひいては社会の要請に応える道につながるかと存じます。

最後に、重ねて会員各位の御支援を宜しくお願い致します。有難うございました。



ハリギリの冬芽と開葉

冬 芽 と 開 葉

常緑広葉樹のまじる屋敷林に育ったから、北国へ来て、落葉広葉樹だけの世界に暮らしてみると、フィールドへの対応の仕方を大きく変えねばならぬことがわかった。

館脇先生の研究室に出入りさせていただいて、樹木の形態を学んだが、とくに冬芽に関心をもった。1年の半ば以上が落葉期なのであるから、冬の樹木学なしにはナチュラルリストたりえない。

もはや10年も前になるが、「落葉広葉樹図譜」を、四手井先生のお力添えで出版した。厳しい冬も、穏やかな冬も、木の芽はじーっと待っていて、春になれば開葉してゆく。この年も、万緑の季節となった。

(斎藤新一郎)

北海道支部30周年記念事業について

福田 正己（支部幹事長）

本号巻頭言で述べられているように、昭和64年度に支部会は30周年を迎えます。そこで来年度にこれを記念する事業を行うことが理事会で決定されました。これを受けて幹事会では、30周年記念事業を企画するための作業部会を設けて準備にあたることとしました。すでにさまざまな企画や案が寄せられていますが、作業部会ではこれらを整理し、また実現のための検討を加える予定です。そこで、会員の皆様から広く御意見を伺い、今後の準備の参考とさせて頂きたいと考えております。すでに第1回の準備のための作業部会が開催されましたので、その折に提案されあるいは検討された事業内容について次に御紹介いたします。

① 記念式典の開催

昭和64年6月上旬に予定されている総会と研究発表会の開催に際して、30周年記念の式典を行う。30周年の歩みを振り返り、創立にたずさわった方々のお話を伺いながら、あわせて今後の支部会活動の進展を目指すこととします。式典はあまり華美にはしないで、いわば内輪のお祝いの会としてはどうかとの提案も出されています。

② 雪氷観測法の解説書の出版

30周年を記念し、積雪観測などの雪氷一般の観測法を解説したいわばハンドブックを編纂し出版する。これは、30周年事業として後々に意義のあるを遺してはどの考えで多くの方から提案がありました。雪氷についての関心が高まりつつあるのにもかかわらず、積雪の観測法などをまとめた解説書が出版されていないため、学会としても充分にこうした要請に答えられないのが現状です。たとえば、道路面の圧雪の状態をどのように定量化して表現するか、地吹雪による視程の悪化をどう数値化するかなど、さまざまな雪氷に関連する問題を考える上で、それらの基礎となる雪氷観測法がまず必要となります。こうしたニーズに答えることから、30周年事業として雪氷観測法の解説書を出版することは、たいへんに意義深いことといえましょう。では、どのような内容を盛り込んだらよいのでしょうか。積雪や凍土、吹雪などのような雪氷に関わる事項を選び、また解説するにあたって、どのレベルにあわせるかなど、今後具体化にはさまざまな検討事項が残されています。広く会員の皆様からのご意見をお寄せ下さい。最後に出版にあたっては、本の入手が容易に行えるような方法、あるいは出版社を考えるべきだとの指摘がありました。つまり、支部会の出版物としてではなく、しかるべき出版社を通じて本を出すことが望ましいとの意見です。これについてもご意見をお聞かせください。

③ 雪氷関係実用及び基礎データ集の作成

北海道内の寒さに関わるさまざまなデータを集大成した資料集を編纂してまとめる。そのねらいは、北海道内の積雪深や土壌凍結深の分布などは個別に報告されているが、これらを集大成して利用しやすい形で出版することにあります。また、これには図集を付けて北海道の寒さや積雪が一目でわかるようにする。そのねらいは概ね了解されていますが、著作権等についても検討する必要もあり、さらに今後検討を重ねることとしました。また、1冊にまとまらないものの、「北海道の雪氷」の巻末に少しづつ付け加え、ある程度まで蓄積したところでまとめて出版してはとの意見も出されました。

④ 会員名簿および研究機関一覧の出版

会員相互の情報交換を促進する上で、単に会員の氏名と所属名だけでなく、専門分野やその他の情報を盛り込んだ名簿をまとめる。たしかに、現在の雪氷学会名簿では、情報や問い合わせをするのには充分とはいえません。そこで30周年を機に、より使いやすく、そして情報データバンクとしての機能を備えた支部会会員名簿を作成することは意義があるように思えます。さらに会員だけでなく、内外の雪氷関連研究機関の一覧を付け加えたらとの意見も出されました。実際に会員名簿を作成するには、アンケート調査を皆様にお願ひする必要があります。もし具体化が進み、来年度に間に合えば「北海道の雪氷No.8」の巻末に付け加えて出版することも可能でしょう。

⑤ 子供向けの雪氷啓蒙書の編纂と出版

寒さや雪氷についての理解を深めるために、子供向けに分かりやすい本をまとめてはどうかとの意見が出されました。小学校では、郷土の自然環境を正しく理解する科目がほとんどないので、これを補う意味でも雪氷に関する啓蒙書を支部会で編纂することは意義深いと思われます。市町村の除排雪は、市民による自発的な協力ぬきには難しい状況にあり、これを促進する上でも積雪について子供のころからの理解が不可欠となっています。そこで学校の教科の隙間を埋めるような、分かりやすい雪氷の教科書を出版してみてもとの声があります。さらに、雪氷観測法をビデオ化してはとの提案もありました。どのようなメディアに依るかは、実現性や経費負担の点などを検討していかねばなりません。これについても皆様のご意見をお聞かせください。

⑥ その他

以上に挙げた項目以外でも、ぜひ取り上げたら良いと思われる企画などがあります。支部会事務局あてにお寄せください。あと1年の準備期間がありますので、なるべく多くの方々の御意見やアイデアに基づいて企画を具体化したいと考えております。

昭和63年度研究発表会講演要旨

日時： 昭和63年6月7日（火）

場所： 北大国際学術交流会館、第1会議室

研究発表会プログラム

14：10～15：10 座長 西村 浩一（北大・低温研）

1. 路面の雪質と自動車運転技法
堀内 数（北海道工業大学）
2. スノープレッシャーピローを用いた積雪重量計の開発
佐山惣吾、田村 勇、西川泰則（北海道工業開発試験所）
3. 人工着氷実験（材質の違いによる電線着氷について）
藤井 裕、山岡 勝、南雲恵介（北海道電力（株）総合研究所）
4. 非定常熱源法（サーマルプローブ法）による凍土の熱伝導率測定の問題点
張 津生（中国科学院蘭州氷河凍土研究所）
福田正己（北大低温科学研究所）

15：20～16：20 座長 藤吉 康志（北大・低温研）

5. 北見における積雪観測
高橋修平、百武欣二（北見工業大学）
6. 永久凍土地帯の小流域における夏期の熱収支
石川信敬、兒玉裕二、小林大二（北大低温科学研究所）
7. 雪尺のまわりにできる雪の穴について
小島賢治
8. 膜構造物の屋上融雪に関する基礎研究
苔米地司（北海道工業大学）
本郷 剛、岩井孝次（鹿島建設技術研究所）